

文 語 口 語
對 照 語 法

文學士吉岡鄉甫著

文語
口語

對照語法

文學士吉岡鄉甫著

文學士吉岡郷

日

文語
口語
對照語法

東京光風館藏版

序

言語の主たる目的は正しく思想を發表するにある。随つて言語教授の根柢は先づ思想を養ひ、其の思想を正式に發表する事を教ふるにある。他人の思想を理解するといふのは、之を自己の言語に翻譯し、之を自己の思想に再現せしめるは外ならぬのである。これは第二次的の事である。まして他人の文章を読み、其の上から他人の思想を理解するといふのは、先づ文章から言語、言語から思想を理解せしめるもので、いはば三重の手段を経て、後其の域に達するものである。これは言文一致の文章の上でいへる事で、古語や外國語の上になれば、其の手段は今一層複雑である。今日我が國の國語教育の上で、此の關係を能く會得し、正しき方法を以て生徒を教授しつ

つある人、もしくは學校は極めて尠ない。帝國教育の全權を握る文部省に於てすら、此の方針は未だ確立して居らぬ。大臣が變れば方針がかはるといふ有様で、誠に斯道の上からいふと、情ない次第である。此の時に當り、かかる上の注意を廣く世間の人に喚起させ、同時に此の大方針を他日確立させる様に盡力して行くのは、學者の義務である。吉岡君は長く文部省の編修官となつて國定教科書を編纂され、又文部省視學官として廣く全國の學校教育を視察され、又我が文科大學で國語學の講義をされる傍、曩には日本口語法を著はし、此の度は此の對照語法を著はされて、種々の方面から我が帝國の言語の爲に貢獻されて居る。誠に喜ばしき事であると共に、君の熱誠に對しては感謝の意を表せざるを得ない。

此の書は文語と口語とを對照し、此の上から吾人の思想が如何に二様の形式に依つて發表されて居るかを示して居る。併し猶一步進んで考へて見れば、今日の言語の智識を根柢として文語の智識を闡明しようと試みて居るとも見える。文語口語の上に確然たる考の附いて居らぬ現代には極めて有益な著述と信ずる。

此の書を讀まれる所の諸君はどうぞ口語の威力を感得し、此の教授の大切な事に注意し、口語の言文一致體を發達させ、これで我が日本語を統一し、此の言葉で世界的の文學を發生せしめるやうに盡力して戴きたい。これが私が此の著者及讀者に對ひての願である。

明治四十五年六月

上田萬年識

緒言

一、本書は著者が昨年夏某縣の夏季講習會に於て、小學校及び中等學校の教員諸氏の爲に講述せるものの速記を整理・増訂したるものにして、文語法・口語法に關する通識を與へ、且相互の關係を明かにせむことを期せるものなり。

二、文語法と口語法との關係は從來學者の未だ多く其の攷究に着手せざりし事項にして、今後の闡明に俟つべきもの甚だ多し。著者は數年來本務の餘暇を以て此の方面の研鑽に思を潜め、特に文語法の推移・變遷して今日の口語法をなせる經路を尋討せむことを力めつゝありと雖も、未だ堂奥に達せざる所ありと信ずるを以て、今は総べてこれを割愛せり。

三、本書の文語法に關して記す所は概ね舊來の諸説を統合補正したるものなりと雖も、竊かに自ら創見なりと信ずるものも無きにあらず。而も著者の知見の狹小なる、自ら創見と信ずる所にして、既に先學の道破せるものも亦之なきを保せず。現代の文法書中著書が最も多く參考に供したるは、木槻博士の「廣日本文典」關別記和田文學士の「日本文典講義」三矢氏の「高等日本文法」山田氏の「日本文法論」國語調查委員會編纂「現行普通文法」改定案調查報告の「口語法調查報告」口語法分布圖等にして、用例は中等學校教科書及び保科文學士の「日本口語法」より採れるもの少からず。茲に記して以て負ふ所を明かにす。

四、右の外本書の讀者に對し、特に注意を請はむとする所は、本書第一章總論

に於て之を詳しくせり。讀者は先づ之を閱讀して、著者講述の方針を知
了せられむことを望む。

三、本書を出版するに方り恩師上田博士の特に序文を贈られ、學友和田信二
郎君の校正に助力を與へられたるは、著者の感謝して措かざる所なり。

明治四十五年五月

著者識す

文語
口語
對照語法

目次

第一章	總論	一頁
第二章	語法の部類	一六
第三章	名詞	二五
第一節	敬語法	二六
第二節	名詞の數	三一
第四章	代名詞	三七
第一節	事物代名詞	三八
第二節	場所代名詞	四三

第三節	方向代名詞	四四
-----	-------	----

第四節	人代名詞	四六
-----	------	----

第五章	數詞	五六
-----	----	----

第六章	動詞	六四
-----	----	----

第一節	活用の種類	六六
-----	-------	----

甲	四段活用・良行變格活用及び奈行變格活用	七〇
---	---------------------	----

乙	上一段活用及び上二段活用	七四
---	--------------	----

丙	下一段活用及び下二段活用	七九
---	--------------	----

丁	加行變格活用	八四
---	--------	----

戊	佐行變格活用	八五
---	--------	----

第二節	活用の用法及び其の名稱	九三
-----	-------------	----

第三節	活用形の音便	一〇六
-----	--------	-----

第四節	自他	一二二
-----	----	-----

第五節	敬讓動詞	一二六
-----	------	-----

第七章 形容詞

一三五

第一節 形容詞及び其の活用……………一三五

第二節 語幹活用形の用法及び其の名稱……………一三八

第三節 活用形の音便……………一三五

第四節 形容動詞……………一三七

甲 第一種形容動詞……………一三七

乙 第二種形容動詞……………一三九

丙 第三種形容動詞……………一四六

第八章 副詞……………一四九

第九章 接續詞……………一五二

第十章 感歎詞……………一五六

第十一章 助動詞……………一五八

第一節 所動助動詞……………一五九

第二節	令動助動詞	一六七
第三節	敬讓助動詞	一七三
甲	崇敬助動詞	一七三
乙	謙讓助動詞	一七九
丙	鄭重助動詞	一八一
第四節	指定助動詞	一八六
第五節	否定助動詞	一九一
第六節	時の助動詞	一九七
甲	現在時	一九七
乙	存在時及び進行時	一九九
丙	完了時	二〇五
丁	過去時	二一〇
戊	存在的過去時及び進行的過去時	二一七
己	完了的過去時	二一八
庚	未來時	二二〇

辛 存在的未來時及び進行的未來時……………三三

壬 完了的未來時……………三三

第七節 推量の助動詞……………二六

第八節 希望の助動詞……………二四

第九節 比況助動詞……………二四

第十二章 助詞……………二四

第一節 第一類の助詞……………二四

第二節 第二類の助詞……………二五

第三節 第三類の助詞……………二六

第四節 第四類の助詞……………二七

第五節 第五類の助詞……………二八

第十三章 文及び其の成分……………二九

第十四章 文の成分の資格……………三〇

第十五章 文の他の成分……………三一

第十六章	文の成分の位置	三二
第十七章	文の成分の省略	三七
第十八章	節の種類	三四
第十九章	文の種類	三五

目次終